インサイト

ガザ紛争　あらためてラビンの死を悼む

福田　幸正
GLOBAL GROUP 21 JAPAN, Inc.
（元 中東・北アフリカ経済協力開発銀行　設立準備チーム）

「ハマスの急襲に驚いたが、次第に違うことが気になり始めた。中東に長年携わる研究者の発言の少なさである。」と難じるのは東京新聞の田原牧論説委員[1]。

ウクライナの戦争が二年目に入ったと思っていたら、10 月 7 日、今度はパレスチナで突然戦火が上がった。リアルタイムでガザの地獄図さながらの現地映像を見るたびに、凄惨な報復の連鎖を断ち切ってほしい、と願わざるをえない。そして、その決断ができるのは、紛争当事者の指導者だけだと思う。最大の悲劇は、イスラエル、パレスチナ双方とも、そのような決断ができる真の指導者がいないことだ。

ちょうど 30 年前の 1993 年 9 月 13 日、イスラエルとパレスチナの指導者は長年の怨讐を超えて苦渋の選択を行い、共存することに合意するという画期的な出来事があった（パレスチナ暫定自治合意）。イスラエルでこの合意を主導したのが当時の首相、イツハク・ラビンだった（1994 年、ラビンはその功績をたたえられて外相のシモン・ペレスと、もう一方の当事者であるアラファト PLO 議長とともにノーベル平和賞を授与された）。当時、この合意は「不可逆（Irreversible）」とか「ルビコン川を渡った」と、大いに称賛された。

ラビンはホワイトハウスでのパレスチナ暫定自治合意調印直後のスピーチの中で、次のようにパレスチナ人に呼びかけた[2]。なまりは強いがラビンの英語スピーチは人の胸を打つものがあり、原文のままご紹介したい（脚注２と３の C-SPAN のビデオもご参照）。

> Let me say to you, the Palestinians: We are destined to live together on the same soil, in the same land. We, the soldiers who have returned from battle stained with

---

[1] 「視点 イスラエルのガザ侵攻 人は進歩しているのか」、東京新聞、2023 年 11 月 22 日。（https://www.tokyo-np.co.jp/article/291479）

[2] Remarks by PM Yitzhak Rabin at signing of Declaration of Principles, 13.09.1993, Ministry of Foreign Affairs, Israel
https://www.gov.il/en/Departments/General/remarks-by-pm-yitzhak-rabin-at-signing-of-dop-13-sep-93
Israel-Palestine Peace Agreement, September 13, 1993, C-SPAN（46:50～55:55）
https://www.c-span.org/video/?50328-1/israel-palestine-peace-agreement

blood, we who have seen our relatives and friends killed before our eyes, we who have attended their funerals and cannot look into the eyes of their parents, we who have come from a land where parents bury their children, we who have fought against you, the Palestinians –

We say to you today in a loud and a clear voice: Enough of blood and tears. Enough. We have no desire for revenge. We harbor no hatred towards you. We, like you, are people, people who want to build a home, to plant a tree, to love, to live side by side with you in dignity, in empathy, as human beings, as free men. We are today giving peace a chance, and saying again to you: Enough. Let us pray that a day will come when we all will say: Farewell to the arms.

We wish to open a new chapter in the sad book of our lives together a chapter of mutual recognition, of good neighborliness, of mutual respect, of understanding. We hope to embark on a new era in the history of the Middle East. Today, here in Washington, at the White House, we will begin a new reckoning in relations between peoples, between parents tired of war, between children who will not know war.

そして、ラビンは旧約聖書「コヘレトの言葉」を引用して、平和の到来を厳かに宣言したのだった。

Our inner strength, our high moral values, have been derived for thousands of years from the Book of Books, in one of which, Koheleth, we read:

To everything there is a season, and a time to every purpose under heaven:
A time to be born, and a time to die;
A time to kill, and a time to heal;
A time to weep and a time to laugh;
A time to love, and a time to hate;
A time of war, and a time of peace.

Ladies and Gentlemen, the time for peace has come.

ラビンはその翌年の 1994 年には隣国のヨルダンとも平和条約を結び、着々と中東和平を進めていった（1994 年 10 月 26 日のイスラエル・ヨルダン平和条約調印式典の標語は「Shalom, Salaam, Peace」。それぞれヘブライ語、アラビア語、英語で「平和」を意味する）。平和条約に先立ち、両国の戦争状態終結を宣言する「ワシントン宣言」に署名後、米国議会に招かれたラビンは演説の中で、同席したヨルダンのフセイン国王に向

かって次のように切々と語りかけた（1994 年 7 月 26 日）[3]。（和約は福田）

Your Majesty, we have both seen a lot in our lifetime. We have both seen too much suffering. What will you leave to your children? What will I leave to my grandchildren? I have only dreams: to build a better world – a world of understanding and harmony, a world in which it is a joy to live. This is not asking too much.

おたがい長い人生のなかで多くのことを見てきました。
おたがいあまりにも多くの苦しみを目にしてきました。
あなたはこどもたちに何をのこされますか？
わたくしは孫たちに何をのこしてあげられましょう？
わたくしがのこしてあげられるものは夢だけです。
それはよりよい世界を築くという夢です。
理解と調和によって立つ世界。
生きているそれだけで楽しい世界。
これは欲張った夢とは思わない。

And I, I.D. Number 30743, Retired Lieutenant-General Yitzhak Rabin, a soldier in the Israel Defense Forces, and a soldier in the army of peace; I, who sent regiments into the fire and soldiers to their deaths, I say to you, Your Majesty, the King of Jordan, and I say to you, American friends:
Today we are embarking on a battle that has no dead and no wounded, no blood and no anguish. This is the only battle that is a pleasure to wage – the battle for peace.

認識番号 30743、退役陸軍中将イツハク・ラビン、イスラエル国防軍兵士。
そして、いま、わたくしは平和の戦士なのです。
軍隊を戦火と死に送った者として、ヨルダン国王とアメリカの友人に申し上げたいことがあります。
今日、取り掛かろうとしている戦いは、戦死者も負傷者も流血も苦しみもない戦いです。遂行することが愉快な唯一の戦いです。
それは平和のための戦いなのです。

これらはすべて、軍人として何度もパレスチナと戦ったラビンだからこそ発することができる重みのある言葉だった。ところがその翌年、ラビンはパレスチナとの和平に反対するイスラエルの若者の凶弾に倒れ、帰らぬ人となった。戦いに明け暮れる世界とは全

[3] Israeli and Jordanian Leaders Addresses, July 26, 1994, C-SPAN (41:20～)
https://www.c-span.org/video/?58998-1/israeli-jordanian-leaders-addresses

く違った世界があるのだというラビンの夢を、和平に反対する人々に説得しきれなかった代償はあまりにも大きかった。その日を境に、歩み始めたかに見えた中東和平は徐々に葬られていき、今回の 10 月 7 日以降の最悪の事態に至ったといえる。

そしていま、和解し難い事態にあればこそ、当事者にはこのラビンの言葉を噛み締めてもらいたいと切に願う。そんな思いで 11 月 4 日のラビンの 28 年目の命日を過ごした。ラビンがもしいま生きていてくれたのなら・・・。

それにしても、ラビンのことが世界から忘れられていることは残念でならない[4]。日本にも多くの中東専門家がおり、10 月 7 日以来、テレビ・ラジオで引っ張りだこだ。その多くは、見たことのあるシニアな専門家か、あるいはガザ紛争を機会に初登場してきた新進気鋭の 40 歳前後の若手研究者たちだが、彼らからもラビンの英断についての話を聞いたことがない。

1993 年のパレスチナ暫定自治合意を契機として、90 年代、国際社会は中東和平プロセスに相当の熱量をもって取り組み、一般の関心も高かった。そのような当時の熱い空気を胸いっぱい吸い込んだ人々は、いまでは 50 歳代以上の世代と考えていいだろう（例外的に早熟なら 40 歳代後半も含まれる）。中東専門家とはいえ、50 歳代以下の若い研究者には、あの激動の 90 年代の直接的な記憶はない。したがって、若手中東研究者にラビンのことにピンとくることを期待するのは酷かもしれない。しかし、中東に長年携わってきた専門家からラビンへの言及がないのは理解に苦しむ。彼らは（ジャーナリストや文化人も含め）いったい何を見て、何を感じてきたのか。確かにテレビ・ラジオに駆り出されてきている中東専門家は、老いも若きも的確な情勢分析を一般国民に提供してくれている。それは門外漢にとっては大変ありがたいことだが、特にベテラン中東専門家にこそ、豊富な知識の中からラビンの言葉のような歴史の至宝を引き出し、それを平和のために声を大にして発信していただきたい。

冒頭の記事を、田原牧氏は次のように締めくくっている。
「命の価値の不平等、虐待の連鎖、大義による死の強制。目新しくない野蛮さが繰り返され、いまも目前で展開されている。人は進歩しているのか。その回答への逡巡が研究者の寡黙さの一因かもしれない。」

---

[4] 11 月 4 日早朝の NHK ラジオ「今日は何の日」でも、その日が 28 年前にラビンが暗殺された日ということはとり上げられなかった。また、同日、在京イスラエル大使館の周辺で、イスラエル軍によるガザ攻撃の即時停止を求めるデモが行われ（主催者側によると参加者数は約 1,600 人）、多くの文化人も声を上げたが、報道を見る限り、その中でラビンに触れる発言はなかった。